

## 万葉集はちょっとすごいと思う

『新編日本古典文学全集(6～9)―萬葉集(1～4)』

小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳／小学館

『日本語の奇跡：「アイウエオ」と「いろは」の発明』

山口諭司著／新潮新書

『額田女王』

井上靖著／新潮文庫

『天の川の太陽 改版 上・下』

黒岩重吾著／中公文庫

『サラダ記念日』

依万智著／河出文庫

『英語でよむ万葉集』

リービ英雄著／岩波新書

『万葉の人びと』

犬養孝著／新潮文庫

万葉集のすごいところその1：量がすごい。

収録されている歌は4516首（小学館版：写本によって異同があるのかな）。これは古今和歌集の4倍強に当たる。現在は活字で印刷されているので解説付きでもハードカバー4冊で済むが、オリジナルの形態は「毛筆手書き」の「巻物」（だから文字通り巻第1から巻第20）であり、全巻そろいだと、保管するためには引越し用の段ボール箱くらいの入れ物（木箱とか厨子とか）が必要なはずで、総重量は10kgを越えたはずだ（と、小学館版の巻頭解説に書いてあった）。それほど嵩張るにもかかわらず（火事や戦の際などに担いで逃げるのはちょっと困難）1200年の時を越えて現在に残っているということは（成立は八世紀後半ころ）、どれほどの写本（当然手書き）が作られ、どれほど大事に保存されてきたのか、と思うとその情熱に畏怖すら感じる（基本的に日本人は恐ろしく物持ちが良いけど）。

万葉集のすごいところその2：上は天皇から下は庶民の歌まで収録されている。

他の文化圏では、詩歌などというものは王族、貴族のものであり、日々の生活に追われる庶民からは遠いものだったろう。よしんば庶民にも詩があったとしても同じ歌集や詩集には収録されなかったはずだ。一方、万葉集の最終編者とされる大伴家持は、詠み人の身分に拘らず「歌」そのものの価値をみて収録している。

---

そしてこのことは、我々日本人の先祖は千数百年前から天皇も貴族もそして庶民ですらも同じ形式で一定レベル以上の歌を作り交換し合う文化を持っていたことも意味している。

万葉集のすごいところその3：日本語で書かれている。

日本人が文字（漢字）の存在を知ったのは弥生時代の中頃（二千年くらい前）だろう。大陸渡りの鏡や皇帝からもらった金印に刻まれていた文字を見て、便利なもの（アプリ）だ、と気がついたはずだ。ただ、残念なことにそのアプリは大陸のOS（漢文）上で使うことが前提だった。仕方なく日本人はそのOSごとアプリを導入し、以来日本の公文書は漢文（だんだん日本風のなんちゃって漢文ないしはその訓読体になるが）で書かれることになった。この、公文書を漢文で書く習慣はついこの間、20世紀の前半まで続いた。

しかし、日本人の日本人たる所以の一つは日本語を使うところにある。声に出すだけで消えて行ってしまう日本語を何とか形に残せないか、という欲求から日本人は漢字導入後の早い段階から漢字に借音（しゃくおん：オリジナルの読みの音だけ使う）と借訓（しゃくくん：オリジナルの意味に日本語の読みを当てはめる）という新しい使い方を編み出し、日本語を文字で書き留める試みを始めた（片仮名、平仮名の登場はこのずっと後）。この使い方は古事記にも見られるが、大々的なものは万葉集の万葉仮名であろう。これは、現在でいえば、コンピュータ用の機械語でラブレターを書く、とかいうレベルのとんでもない試みであったと思うが、古代日本人はそのとんでもない試みを兎も角もやってのけたことになる。

ただ、この万葉仮名は、片仮名、平仮名出現以前のプロトタイプの悲しさか、150年もすると（平安時代前期）読めなくなってしまう（デタラメ漢文にしか見えない）が、中に天皇の名前が見えているので廃棄するわけにも行かず、解読の勅命が下る。以来、解読の研究は現在でも続いており、まだ読んでいない歌（難訓歌）も全体の1%未満ながら存在している。万葉仮名と難訓歌の例を示すと、

『莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣吾瀨子之射立為兼五可新何本』

『莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣 わが背子が い立たせりけむ いつかし 嚴ぬかたのおほきみ檀が本』額田王

卷第1の9

(????????????? 我が君が そばに立たれたという 大きな檀の木の下：現代語訳は小学館版に準拠。一部筆者。以下同)

未解読部分は12文字あり第1、第2句に相当しているが、説はいろいろあるものの結局読めていない。第3句以降の万葉仮名もよくも書いたものだと思うし、よく読み解いたものだと思う。未解読部分については、古代朝鮮語(?)で読める、という言葉説が流行ったことがあるが、その後徹底的に批判され現在では否定されている。

万葉仮名、片仮名、平仮名については山口謠司氏の『日本語の奇跡－「アイウエオ」と「いろは」の発明』が読みやすく面白。

万葉集のすごいところその4：全然堅くない。日本人の感性の原点。

古典だ、文法だ、という受験かよ、と思って本を開く気も起きないかもしれないが、内容は至って日本的、というか日本人の感性そのものである。以下に挙げる歌を音読してみよう。音読してこそ歌の良さを感じることができる。

巻第一の冒頭に納められている歌は雄略天皇（記紀ではエピソードの多い天皇）の御製で、

『籠こもよ美籠み持こもち 堀ふくし申みもよ美堀み申ふくし持もち この岳おかに菜摘なます兄 家聞かかな名なのら  
さね 空あみつ大和の国は 押おしなべて吾わこそ居いれ 敷しきなべて吾わこそ座ませ 吾わ  
こそは告つらめ 家いをも名なをも』雄略天皇 卷第1の1

である。これを現代語訳をすると、

(籠も美しい籠を持ち 竹べらも美しいへらを持ってこの丘で若菜を摘んでいる娘

---

さん あなたはどこの家の娘さんですか？ お名前は？（そらみつ：大和の枕詞）  
この大和の国にはことごとく私が君臨しているのだよ すみずみまで私が治めて  
いるのだよ 私の方こそ家も名前も言っちゃうよ）

となって、これはどう見たって女の子をナンパする歌でしょ（天皇が欲望と権力  
に任せて野にいる少女を強引に攫うのでは無くて、歌を贈っている点にも注目）。

万葉集の中で最も人気のある歌とされる額田王の

『あかねさす <sup>むらさきの</sup>紫野行き <sup>しめの</sup>標野ゆき <sup>のもり</sup>野守は見ずや 君が袖振る』額田王 巻第  
1の20

（あかねさす：紫の枕詞） あゝ紫草の野を行き その御料地の野を歩いてると  
き 野の番人は見ているではありませんか あなたが袖をお振りになるのを）

には <sup>おおあまのみこ</sup>大海人皇子からの返しの歌があり、それが

『<sup>むらさき</sup>紫草の にはへる妹を 憎くあらば 人妻ゆゑに われ恋ひめやも』大海人皇  
子 巻第1の21

（紫草のように美しい貴女が もし憎かったなら いまは人妻の貴女を どうし  
て恋しく思ったりしましょうか）

である。一見不倫関係のどきどきする歌のやりとりに見えるが、状況はそれより  
も複雑で、まず、この二人は一時は恋愛関係にあり、額田王は大海人皇子の娘を  
産んでいるが、その後は大海人皇子の兄の天智天皇の後宮に入っている（つまり  
額田王の現夫は天智天皇）。そして、これらの歌は秘めやかに交わされたものでは  
無く、天智天皇臨席の宴の場で読み上げられたとされている（このとき3名とも  
おっさん、お婆さんの年齢）。なんちゅうか大人の関係というか……この後、壬  
申の乱が起こって大海人皇子は天智天皇の息子（つまり皇子の甥）と戦って敗死  
させており、さらに皇子と額田王との娘がその甥の妃になっていたという関係な

---

ので、全然笑えない大人の関係の上に上記の歌がある。

余談ながら、この辺の事情の詳細は井上靖氏の『額田女王』か黒岩重吾氏の『天の川の太陽』を読むと良いだろう。井上氏の作品は文学的で演劇を観ているような感じだし、黒岩氏の作品は文章にやや趣を欠くものの記述が詳細で大河ドラマのようだ。

また、コミカルな歌で、

『来むと言ふも 来ぬ時あるを 来じと言ふを 来むとは待たじ 来じと言ふものこ おおどものさかのうへのいらつめ』 大伴坂上郎女 巻第4の527

(来ようと言っても来ないときがあるのに 来ないって言ってるのを来ると思って待ったりはしません 来ないって言ってるんだから)

なんてものもある。これは言葉のリズムを楽しむ歌であり、現代のコピーライターだって似たような文句を考えそうだが、現代語よりも古語の方がシャープな感じがする。

海外へ出て活躍する技大卒業生に贈るには次のような歌が良いだろうか。

『大船おおふねに 真楫まかじしじ貫ぬき この吾子わがこを 唐国からくにへ遣やる 齋いへ神かみたち』 藤原太后(光明皇太后) 巻第19の4240

(大船に櫓をいっぱい取り付けてやり、この愛しい子を、唐国へやります。神々よ、守りなさい)

これは、甥の藤原清河が遣唐大使に任ぜられたときに贈ったもので、遣唐使は本当に命がけだったからこのくらい強い歌になったのだろう。

映画「二百三高地」の主題歌となったさだまさし氏の「防人の詩さきもりのうた」の本歌は防人の歌では無く、雑歌ぞうかの中に入っている(防人の歌の中で探したが良いものが無くふと見つけた雑歌をモチーフにした、と本人が語っていたのをラジオで聴いた)。

---

『鯨魚取り 海や死にする 山や死にする 死ぬれこそ 海は潮干て、山は枯れすれ』作者未詳 巻第16の3852

(<鯨を捕る：「海」の枕詞> 海は死にますか 山は死にますか 死ぬからこそ 海は潮が引き 山は枯れるのです)

ここからあの名曲になるのだから、作詞家の才能というものはすごい。

音読をしてみると我々の先祖は、日本語では5音節と7音節を主体にして言葉を組み合わせると心地よい、ということに気づき自分の気持ちを表す歌にしていたことが判る。千年以上の時を隔てた俵万智氏の『サラダ記念日』だって舞台と小道具が違うだけでその感性は万葉集と違いは無いと思う。

日本人の感性そのもの、と書いたがその感性は別に日本人のドメスティックな精神世界に限局された独りよがりのもでは無く、英語にも翻訳され詩として評価されている。もちろん、5・7調、7・5調の響きは消えてしまうが、それは日本人が翻訳物の海外の詩集を読むのでも同じこと。リービ英雄氏の『英語でよむ万葉集』で取り上げられている歌は、英語にするとなるほどこうなるのか、と感心するし、上の雄略天皇の歌の英訳はそのストレートさが笑えた。

古文なんてわかんないよ、と思うかもしれないが、古語ではあってもやはりそれは日本語であり、我々はこれらの歌を詠んだ人々の言語のDNAを引き継いでいることは間違いない。読もうと思えば気合いで読める。文法やら何やら難しいことは解らなくても歌はわかる。全部読むなんて無謀な挑戦を勧めているわけでは無いが、ばらばらとめくって気に入った歌（必ずある。何しろ4516首も有るのだから）をいくつか覚えておくと、ちょっとかっこいいし、単身で長期にわたって海外に出たときには心のよりどころになってくれるだろう。

でも、まあ、そうはいつでも、やはり、いきなり『万葉集』を開くのはちょっとだけハードルが高いかもしれない。万葉集の有名な歌や良い歌を解説した本もたくさん出ているので、そういうのから入るのも有りだと思う。筆者は1年間一人で米国に滞在したときには犬飼孝氏の『万葉の人びと』を持っていった。

---

## 執筆者紹介

### 内田 希

物質材料工学専攻准教授。専門領域は、無機化学、計算機化学、熱化学。

- 『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
- 『新編日本古典文学全集（6～9）-萬葉集（1～4）』小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳 小学館 1994-1996年 4,608-4,814円
- 『日本語の奇跡：「アイウエオ」と「いろは」の発明』山口謠司著 新潮社（新潮新書）2007年 734円
- 『額田女王』井上靖著 新潮社（新潮文庫）2010年 907円
- 『天の川の太陽 改版 上・下』黒岩重吾著 中央公論社 中公文庫 1996年 1,153-1,234円
- 『サラダ記念日』俵万智著 河出書房新社（河出文庫）1989年 475円
- 『英語でよむ万葉集』リービ英雄著 岩波書店（岩波新書）2004年 842円
- 『万葉の人びと』犬養孝著 新潮社（新潮文庫）1981年 品切

[ブックガイド目次へ](#)